
コンプレックス

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンプレックス

【Nコード】

N4370W

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

八条大学工学部教授若生碧にも好きな相手があった。だが彼女は小柄なことを気にしている。恋愛ものです。主人公のモデルはある声優さんだったりします。

第一章

コンプレックス

若生碧は八条大学工学部で教授を務めている。まだ二十代だ。

少し吊り目であるが黒い部分の多い綺麗な一重の目をしている。

黒髪をシャトーにして綺麗に揃えている。白い顔立ちをしており鼻の形もいい。小さな唇の色は鮮やかでまるで少女の様だ。

だが才媛である。二十代で教授になっただけはある。工学部において知らぬ者はないまでである。その論文も研究もだ。学会において非常に注目されている。

しかし彼女はだ。どうにもだった。

何か常に意識しているようでありだ。周りからはこう言われているのだ。

「凄い可愛くて頭もいいのにな」

「何か自信なさげっていうか？」

「妙に意識してない？」

「そうだよな」

それが彼女だというのだ。その資質や外見によつてではないのだ。

そしてだ。妙にだ。

シックレットブーツやハイヒールを履くのだった。それが彼女だった。

そんな彼女にだ。助手の白鷺美幸は問うのであった。彼女は大学院を卒業したばかりだ。ゼミの頃から碧に教えてもらっているのだ。その彼女がだ。こう碧に問うたのだ。

「あの、教授って」

「何？」

「何か困ったことがありませんか？」

こうだ。彼女を気遣い尋ねるのだった。丁度大学の食堂で一緒に

昼食を食べている時にだ。彼女に尋ねたのだ。その時のことだ。

「何かそんな気がしますけれど」

「別に」

碧はその少女にしか見えないその顔を曇らせて美幸に答えた。傍から見ればだ。

姉と妹に見える。美幸は茶色がかった長い髪を後ろで団子にしてまとめている。はつきりとした二重のやや切れ長の目の睫毛は長い。細い顔をしており奇麗にメイクもしている。美幸の方が年下なのがそれでも彼女が姉に見えるのだ。

その美幸がだ。碧に言うのだった。

「何もないけれど」

「そうですね？」

「ええ、何もないわよ」

また言う碧だった。

「特にね」

「そうですね。それならいいですけどね」

「それだけけれどね」

話題を逸らす様にしてだ。碧は美幸に言った。

「どうかしら。今のこの定食」

「いわし定食ですか」

「ええ、それよ」

鰯を焼いたものにレタスとキャベツ、それにトマトの野菜サラダ、それと若布と葱の味噌汁にたくわんだった。無論白米もある。

ただ碧だけそこに牛乳も置いている。パックのストローのある牛乳だ。そのメニューについてだ。美幸に対して尋ねたのである。

「美味しいでしょ」

「そうですね。私鰯は元は」

「好きじゃなかったの？」

「はい、そうなんです」

そうだと答える美幸だった。

「けれどこうして食べると」

「美味しいでしょ」

「はい、美味しいです」

笑顔で答える美幸だった。実際にその鰯を食べながらだ。それを
おかずにして御飯を食べているのだ。無論碧も同じことをしている。

「ただ焼いただけなのに」

「鰯は血を綺麗にしてくれるし」

「ですよ」

「それにカルシウムもあるから」

碧の言葉はここで必死のものになった。

「だからいいのよ」

「カルシウムですか」

「そう、だからいいのよ」

それでだと美幸に話す碧だった。

「私よく食べるわ」

「鰯ですか」

「それにこれもね」

そのパックの牛乳を飲む。そのうえでの言葉だった。

「これも好きなのよ」

「牛乳もですか」

「身体にいいし何よりもね」

「何よりも？」

「カルシウムがあるから」

またカルシウムの話をする緑だった。

第二章

「だからいいのよ」

「カルシウムですから」

「そう。カルシウムよ」

とにかくだ。碧はカルシウムの話をするのだった。

「だからいいのよ」

「骨を強くしてくれませうしね」

「髪の毛にもいいしね」

「だからいいのよ」

それでだと言う碧だった。どうも心なし必死の顔でだ。

「毎日しっかり飲んでるわ」

「じゃあ毎日骨太なんかは」

「今は売り切れだったから飲んでないけれど」

それでだ。仕方ないという顔になって美幸に話す彼女だった。

「それでもあればね」

「飲まれてるんですね」

「そういうことよ。とにかくカルシウムよ」

熱心にそのカルシウムについて話す彼女だった。

「いいわね」

「わかりました」

そんな話をだ。食べながらしたのだった。そうしてだ。

美幸は毎日碧と共にいた。碧はとにかく学者としてはかなり見事だ。優秀な人材であることは間違いない。しかもそれに加えてだ。

人格円満である。穏やかで怒ったことは殆んどない。しかし常にである。何かを気にしているようにしてだ。それでいつも美幸に話すのだった。

「ううん、最近の女の子って」

「女の子ですか」

「皆靴が大きいのかしら」
「こう言うのである。難しい顔でだ。」
「お蔭で私の靴ってね」
「ないんですか？」
「これだけだ」
「やけに高い黒いハイヒールをだ。美幸に見せて話すのだった。」
「実は特別に注文したの」
「そうなんですか」
「そうなのよ。私に合う靴ってね」
「それはだ。どうかというのだ。」
「中々ないのよ」
「大変ですね、それって」
「合う靴って」
「碧は困り果てた顔で話していく。」
「子供の靴だから」
「ううん、教授足小さいんですね」
「足だけじゃないし」
「また美幸に話す彼女だった。」
「何もかもがね。特に」
「特に？」
「あっ、何でもないわ」
「自分の言葉を自分で引っ込めて話す。妙に慌てた感じでだ。」
「何でもないから」
「ううん、とにかく靴は」
「ないんですか」
「それが悩みなのよ」
「また靴の話をするのだった。」
「どうしたものかしらね」
「そうですね。特注って高いですしね」
「服もそうだし」

「服もなんですか」

「この白衣だつてスカートもだけれど」

「やたら長く見える白衣とだ。タイトだが膝が完全に隠れている黒のスカートもだというのだ。」

「どっちもぎりぎりなのよ」

「着られるサイズで、ですか」

「服にも困つてるのよ。どうしたらいいのかしらね」

「大変ですね。何もかも」

「それもこれも」

「感情が昂ぶつてだ。そのつえでの今の碧の言葉だった。」

「全部。結局は」

「結局は？」

「ああ、何でもないわ」

「またこう言う碧だった。」

「何でもないから。気にしないで」

「だったらいいですけど」

「それでだけれど。次の論文はね」

「話は学者のそれに移った。」

「いいかしら」

「あの理論についてのですか」

「ええ。それを書くから」

「今日からですか？」

「少し研究室に籠もるわ」

「そうするというのである。」

第三章

「貴女は先に帰っていいから」

「いえ、私も残ります」

「いいの？」

「だって助手ですから」

だからだ。美幸は微笑んで碧に話すのだった。

「そうさせてもらいますね」

「有り難う。それじゃあね」

「はい、書きましよう」

「ただそれと一緒に」

碧はここでだ。美幸に対してこんなことも言った。

「貴女も論文書かないといけないわよね」

「ええ、ですけど」

「私も手伝うから」

笑顔でだ。美幸に言う碧だった。

「そうするわね」

「いえ、そんな」

「いいのよ。教授は助手に助けてもらうだけじゃないのよ」

「違うんですか」

「教授も助手を助けるものじゃない」

そういうものだ。碧は話すのである。

「教授は師匠で助手は弟子よね」

「そうですね。まさにそれですよね」

「師匠は弟子を助けて成長させるものだから」

「それでなんですか」

「そう。だからね」

それでだ。美幸を助けるというのだ。

こうして二人はお互いの論文を助け合いながら書いていくのだ。

た。二人は実に仲のいい師弟関係であった。しかしそんな日々の中でだ。

碧はだ。ある日のことだ。医学部の校舎に美幸を連れて行った。そこでだ。

背の高い爽やかな青年を見てだ。動きを止めたのだ。

彼は茶色の髪を襟のどこかを短く刈りだ。上だけ伸ばしている。

結構癖のある髪だ。

太く黒い眉は短めで一直線だ。海苔を思わせる。

すらりとした身体に白く細い顔である。目は爽やかで鼻も細く高くだ。中性的な面持ちをしている。

白衣のその彼を見てだ。碧はだ。

立ち止まってしまったのだ。その彼女を見て美幸は声をかけた。

「あの、教授」

「何？」

「どうされたんですか、急に」

その立ち止まった碧への言葉だ。

「立ち止まられて」

「別に何も」

「ないですか？」

「ええ、別に」

こうだ。立ち止まったまま答える彼女だった。

「ないけれど。ただ」

「はい。ただ？」

「何時見ても背が高いわね」

その白衣の彼を見てだ。今校舎の、学校のそれそのままの。ピニールの廊下にコンクリートの壁と蛍光灯のある天井の先が長く続いている空間にいてだ。碧は言うのだった。

「医学部の大杉博士は」

「大杉拓也博士ですね」

「ええ」

その名前に頷く碧だった。顔が少し見惚れている感じだ。
「本当にね」

「そうですね。私とは三十センチ近く離れてますね」

「そこまで離れてるかしら」

「離れてますよ」

美幸は困った顔で話す。

「私一六〇なんですけれど」

「博士はどれ位かしら」

「一八七位ですね」

それ位だというのだ。

「学生時代はバスケット部でしたね」

「そうね。八条中学から高校までホープだったわ」

尚この二人も八条学園出身である。

第四章

「大学でもね」

「あれっ、よく知ってますね」

「まあそれは」

「そういえば」

話をしているうちにだ。美幸はあることに気付いた。それは。

「教授と博士って確か」

「そうなの。同じ学年なの」

そうだと話す碧だった。

「同じクラスだったこともあるわ」

「そうだったんですか。同じクラスだったことも」

「高校三年の時ね。理系コースで」

同じクラスだったというのだ。

「その頃から凄く高かったの」

「ですね。あの背の高さだと特撮俳優にもなれますよ」

特撮俳優は背が高い。それが映えるからだ。それで背の高い若手が選ばれるのだ。

「うっん、そうなんですネ」

「何時見てもいいわね」

碧はほうとした様な声になっていた。

「本当にね」

「ですね。それですけれど」

「あっ、そうね」

碧は美幸に言われてだ。気付いた様な声になってだ。そうしてだ。そのうえでだ。彼女に話すのだった。

「それじゃあ用事を済ませて」

「はい、医学部の栗橋教授にお会いして」

碧と親しい教授だ。その教授と話があったてここに来たのだ。

それでだ。彼女達はその栗橋教授と話してだ。医学部を後にした。しかしだ。

碧は自分の研究室に戻ってからもだ。どうも様子が違っていた。それでだ。

何処か惚けた様子でだ。美幸に話すのだった。

「あのね」

「はい、どうしたんですか？」

「私これでもね」

「これでも？」

「御料理とか得意なのよ」

そうだとだ。美幸に話すのだ。自分の机に座ってだ。

美幸は研究質の本棚を整理している。研究室の左右の壁はそのま本棚になっている。天井にまで届いているそれを整理しているのだ。

その彼女にだ。碧は言ってきたのである。

「それだけけれど。今度ね」

「はい、今度」

「お昼作るけれど」

こんなことを美幸に言うのである。

「どうかしら」

「お昼ですか」

「それで男の人って」

何故かこんなことを言う碧だった。

「どんな食べ物が好きかしら」

「えっ!?!」

美幸は碧の今の言葉にだ。思わず声をあげた。

そしてきよとんとした顔になってだ。こう彼女に問うた。

「あの、食べるのは教授ですよね」

「それと美幸ちゃんだけれど」

「それで何でなんですか!?!」

目を白黒させてだ。碧に尋ねるのだった。

「どうして男の人の好みが」

「あっ、それは」

「ええと、教授って今一人暮らしですよね」

「そうだけれど」

「お父さんやお兄さんとは別に暮らしておられるのに」

それでもだと言う美幸だった。彼女にとってはあまりにも不可思議なことだった。

それで目を白黒させてだ。彼女は言うのだった。

「何でそこで」

「何ていうかね」

碧もだ。狼狽しきった顔になってだ。こう美幸に話した。

「あれなのよ」

「あれって？」

「ちょっと趣向を変えたのよ」

「そうだというのだ。」

「それでなのよ」

「趣向っていいいますと？」

「ほら、私っていつも女の子らしいものばかり作ってるじゃない」

「そうでしたか？」

碧のその言葉にだ。美幸は首を傾げさせて述べた。

第五章

「身体にいいものは作られてますけれど」

「いえ、本当にそうだから」

「そうだったんですか」

「だからね。それでなのよ」

かなり取り繕ってだ。美幸に話すのだった。

「今回はね」

「わかりました。それじゃあ」

「ええ、それじゃあ明日にでも作って来るから」

碧は早速言うのだった。

「そのお弁当ね」

「はい、楽しみにしてますっていうか」

「どうか？」

「で、何を作られるんですか？」

美幸は碧にあらためて問い返す。

「男の人の好きな食べ物っていいいますと」

「まだ決めてなかったわね」

「そうですね。それで何を作られるんですか？」

「ええと。それで男の子の好きなものっていうと」

「カロリーの高いものとかですね」

美幸はすぐに碧に話した。

「例えば唐揚げとか。焼肉とか」

「お肉ね」

「そうですね。そういうのですね」

「わかったわ。肉料理なら」

「教授得意ですよね」

「一番得意なのは精進ものだけねど」

健康志向だからだ。それなのである。

「それでもお肉もね」

「好きですよね」

「ですよね。それなら」

「わかったわ。それじゃあ鶏の唐揚げ作るから」

「はい、楽しみにしてます」

「こうしてだ。何を作るかも決まったのだった。」

「それでは」

「そういうことでね」

弁当の話はこれで終わった。そしてその次の日である。

碧はだ。何故かだ。

弁当を三つ持っていた。それを見てだ。美幸はまた言うのだった。

「あの、数違いませんか？」

「えっ、合ってるけれど」

「だから。私達が食べるんですよ」

美幸はそのことを碧に尋ねる。

「そうですね」

「その為に作ったけれど」

「じゃあ何で三つなんですか？」

美幸はこの日も目をしばたかせながらだ。碧に問うのだった。

「どうしてなんですか、それは」

「ああ、これね」

「教授も私も一つで充分なのに」

「ちよつとね」

碧は言葉を濁してこう述べた。

「まあ何ていうか」

「何ていうか？」

「とりあえず行くところあるから」

そそくさと席から立ってだ。碧は部屋から出ようとする。

その手に最後の一つの弁当がある。それを持って行くようにする。

そしてだ。そうして美幸に言うのだった。

「留守番御願いな」

「何処に行かれるんですか？」

「まあ何ていうか」

恥ずかしそうな顔になる碧だった。そうしてだ。

本当にそそくさとだ。弁当を持って研究室を出てだ。何処かに行くのだった。

その彼女を見送ってからだ。美幸は首を捻った。何がどうなっているのかさっぱりわからなかった。

しかしだ。その中でだ。

美幸は好奇心を抱いてだ。そうしてだった。

研究室を出て鍵をかけてだ。外出中の札をかけてだ。碧の後をつけることにしたのだ。碧は白衣を着ているのですぐにわかった。

その後姿を見つけてだ。そうしてついていくのだった。

するとだ。彼女はだ。

工学部の校舎から医学部の校舎に向かう。それからその中に入っ
てだ。

第六章

誰かを探している。それを見てだ。

美幸もだ。少しだが察してだ。こう呟いたのだった。

「ひよつとして?」

そのことを考えてだ。そうしてだった。

そのうえで碧の後をつける。するとだ。

碧はだ。ある場所に向かおうとしていた。そこは。

医学部の研究室のある場所だった。そこに向かう彼女だった。

そしてだ。そこを歩く拓也を見つけてだった。

立ち止まってだ。そこでだ。

おろおろとしだした。彼を見ながらだ。

行こうとしている感じが中々前に進まない。戸惑い焦っている
雰囲気もある。前に進みたくても前に進めない、まさにそんな状態
の彼女だった。廊下の物陰に隠れて彼を見ているから余計にそう見
えた。

それを見てだ。遂にである。

美幸も事情がわかった。そのうえでだ。

彼女の後ろに来てだ。こう声をかけたのだ。

「教授」

「ひっ!?!」

びくりとした声があがった。

そうしてだ。碧は後ろを振り向いてだ。こう言っただった。

「美幸ちゃん!?!どうして」

「すみません、実は」

「ついて来てたの!?!」

「そうなんです」

「来なくていいのに」

碧は困った顔で言うのだった。

「そんなこと」

「すいません、本当に」

「仕方ないわね」

元々穏やかで優しい性格の碧はだ。これで済ませた。

そしてそのうえでだ。こう美幸に言うのだった。

「今から大事なことがあるけれど」

「大事なことって？」

「ちよつとね」

多くを言おうとはしない。しかしだ。

彼を見る。そうしてだ。

彼女はだ。あらためてだ。

弁当を手に持ち前に出ようとす。しかし死にそうな顔でいるだ

けでだ。それをしないのだ。

その彼女を見てだ。美幸は言うのだった。

「あのですね」

「何？」

「博士が好きなんです」

美幸は言った。

「そうですよね」

「えっと、それは」

「それだったです」

美幸は碧の否定する言葉を遮る形でだ。そのうえでだ。

こうだ。彼女に対して話した。

「一歩前に出ればいいんですよ」

「ちよつとそれは」

「駄目ですか？」

「だって私」

ここでだ。碧の言葉が弱いものになった。そしてだ。

美幸の下からだ。こう言ったのである。

「小さいし」

「だからですか？」

「これだけ小さいと誰も振り向いてくれないじゃない」
自分のそのことを話すのだった。

「だからね。それは」

「ああ、教授は」

「一四五もないから」

小柄である。そのことを言うのである。確かにだ。

碧は小さい。本当に一四五もない感じた。それで美幸の下から言
つてだ。頼りない顔をして話すのである。

「彼は大きいし。とても」

「ううんと、そういう場合はですね」

「そういう場合は？」

「ちよっとすいませんね」

こう碧に言つてだ。そうしてだった。

身体を屈めてだ。両手を彼女の背中にやって。
どんと押した。するとだ。

碧の小さな身体が思いきり前に出た。それで拓也の前に出た。そ
の彼はだ。

碧を見てだ。目をしばたかせて言うのだった。

「若生さん？」

「あっ、うん」

碧は彼の前に出てしまった。こうなつてはだ。

第七章

戸惑いながらもだ。こう言うしかなかった。

「実は」

「そのお弁当は」

「食べて」

引くことはできなくなってしまっていた。そうなればだ。

前に出るしかない。実際に碧は前に出た。

弁当を彼の前に出してだ。こういつたのである。その彼女を廊下の陰から見ながらだ。美幸は優しい笑みを浮かべているのだった。

碧はそれから拓也に毎日弁当を届けるようになった。二人は自然と一緒にいることが多くなった。そんな彼女に対してである。

美幸は研究室でだ。彼女に言うのだった。

「いい感じみたいですね」

「ええ。とてもね」

碧も微笑んでだ。美幸に話すのだった。

「いい感じになってるわ」

「ですよ。そんな雰囲気ですから」

「ただ。何である時背中を押したの？」

碧は研究室の中央に置いている長方形の白いプラスチックのテーブルに座ってそこで本を読みながら美幸に対して尋ねた。読んでいる本は英文のだ。機械工学の本だった。

「どうしてそうしたの？」

「教授あの時戸惑ってましたよね」

美幸は彼女の向かい側に座ってまた論文を書いている。そうしながらの返事だった。

「どうしても出て行けなくて」

「そうだったけれど」

「だから。そうしたんです」

「無理にでも前になのね」

「出てもらったんですよ」

「ちよっと。本当にあの時はね」

碧はそのことを思い出しながらだ。困った顔になって言うのだった。

「足が動けなくなつて」

「教授つてまさか」

「小さいのが気になつてたのよ」

つまりだ。コンプレックスだというのだ。

それでだ。彼女は言うのだった。

「だからどうしてもね」

「博士に言えなかつたんですね」

「そうだったの。それでなの」

「それでなんですか」

「けれど貴女が背中を押してくれたら」

どうだったか。結果はもう出ていた。

「こうしてね。今に至るからね」

「ですよ。そんなものなんですよ」

「そんなものつて？」

「コンプレックスは誰にもあるものですけど」

それを話してからの言葉だった。

「そういうのつて案外は」

「ああして。簡単になのね」

「ものの弾みでどうにかなつちやうものだと思いますよ」

「そうなのね」

「私だつてそうですし」

美幸もだ。そうだというのである。

「私も実はですね」

「実はつて？」

「足が大きいのが悩みだつたんですよ」

それがだというのだ。

「そういうのわかりませんよね」

「そうだったの」

「けれど。今付き合ってる彼氏にそのことを話したらそれで？って
言われて」

「それで終わりだったのね」

「そうなんです。それでどうでもよくなりました」

「そうだとだ。美幸は自分のコンプレックスだったことを笑いなが
ら話した。本当に何でもないといいた感じだ。碧に話すのである。

「そういうものですから」

「じゃあ私のことも」

「はい、気にしなくてそれよりも」

「今みたいになればいいのね」

「そう思いますよ」

「そうかもね」

碧は微笑みでだ。美幸の言葉に頷いた。そのうえでだ。

彼女はだ。こんなことを言うのだった。

「じゃあ私はこれからね」

「もう気にされませんね」

「ええ。そうしていくわ」

その小柄なことをだ。そう考えていくというのだ。
こう話してだ。そうしてであった。

美幸にだ。こんなことを言うのだった。

「じゃあこれからは」

「積極果敢ですね」

「いくわ。彼にもっともつとね」

「はい、頑張つて下さい」

美幸は笑顔で碧に話した。

「学問だけでなく恋愛のことも」

「そうさせてもらつたわね」

小さな身体にだ。喜びを溢れさせて言う碧だった。今の彼女にはもうだ。小柄なことは何の問題もなくなっていた。それは何でもないことに気付いたのだから。

コンプレックス 完

2011・4・24

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4370w/>

コンプレックス

2011年9月5日03時27分発行